ここに書きかけの原稿がある。柔らかな和紙の風合いを持っていて、繊維がやや毛羽立ち気味に不規則に重なり合う、暖かみのある、クリーム色でやや茶色が勝った、自然な色彩を奏でている。万年筆で綴す文字には一筆の中にもインクの青色にグラデーションのような差異が出て海中のような面白味があり、私は例によって読むと言うよりは眺め、手触りを楽しみ、鑑賞する。

この原稿を、

海　鳥（エル・パッハロ・デル・マル）島は北緯二十七度、周囲三十八㎞余りの小さな島である。

南北に列なるアマーリャ諸島の（名ばかりのほんの小さな島も含め）六十三の島々からなる南から十五番目にあり、漁労と羊の放牧とが営みである。南大陸（スール）から北に約一千㎞、北大陸（ノルテ）からも南に約二千㎞の位置にあり、まさしく裂南北大陸海洋（マル・メディテラーノ）の臍であった。

貨幣による商業は少ない。ラ・インディグォ浜にあるサンチャゴ爺さんのBar（バル）がその一つであった。それは白浜から拙く伸びた桟橋（椰子をロープで結わいただけのもの）の端尖、海上にある。流木やら椰子の枝やらを組んで小屋らしく仕立てたものでしかない。幾隻かの軽舟が繋がれた果て尖で、強い陽光を浴び、無頓着に寂として建っている。

時折風に流された。手馴れた爺さんはテキーラを呷りながら独りで三日もあれば十分組み終わらせる。

窓にガラスなどはないし、屋根は椰子の葉を葺いただけのもの。そこから木洩れ日がこぼれ、潮風が通る。床材はもともと樹皮のあらかたを波に削られてしまっているから大まかに成形すればそれらしくなった。日蔭に置かれた、完全に乾き切った木の持つ冷やりとした、それでいて或る種の温みとも言える軽やかさがある感触、その木膚独特の風合いが素足に心地よい。

野趣は心を解放する。四方から抜ける風を浴びながら桟橋の突端で見る海の蒼、藍、紺、碧、青の、燦々たる氾濫は陶酔を促した。平和に満ちあふれ、穏やかでありながらも、激情のように天空へと響鳴し、成層圏の彼方までも駈け上がる、光の波瀾であった。

沖の青は最も濃く高貴なる蒼を湛えている。イーリヤの眸だ。そんなふうに思う。水平線を眺めながら左の頬を無意識にさすった。そこには薄っすらとした琵琶茶色の痕があり、それは額の左の生え際から始まって左の瞼を跨ぎ、途切れながらも細長い諸島の列なりのよう顎の下、よく見れば喉仏のあたりまで点々と続いているものだ。蛇の拓本を取ればこんなものかと思える形であった。痣のようなものとは思っているが、実際になんであるかを知らない。椰子の実を刳り抜いて作られた盞を傾ける。

午後遅く、イタルはテキーラを舐めていた。それは島にはないものでアルカサル島から彼が爺さんのために日々運んで来るものだ。それが彼の仕事だった。手間賃は安いが、彼のような漕ぎ手には楽で割のいい仕事だった。風がよく、海が穏やかな日に帆を張れたならばほんの三〇分だ。ただし海鳥島では漁師すら帆舟など持っていない。ましてやイタルは。手漕ぎで片道に約二時間をかける。彼なら泳いで行けなくもない距離だ。

二〇リットル入りの小さな樽を一つ、帰りもさほど減速しない。効率はわるいが、それが島のやり方だった。天候がわるければその日は行かない。蒸溜所の人はもうなじみでいつも持参の瓶に自分用をもらう。そのぐらいはあたりまえだ。手製の小さな手押し二輪が港の傍らに置きっ放しにしてあり、樽を載せて坂道を下る。アルカサルの街は湾に向かって段をなしながら円戯場のようなすり鉢状になって落ちていて、どこに行くにも狭い坂や階段を避けられない。

運び込めば爺さんが賄い飯を喰わしてくれる。それ以外の食事は海で採り放題の魚や貝や海老や蟹だが、火をとおすだけで料理らしい味つけはしない。Barで喰う昼飯が唯一文化的なご馳走であった。両親も兄弟もいないのだから。

ちなみにこの一帯の領主パスタリャ家の定めた法では飲酒に関する制限はない。法に定めがあれば舐めずにいたであろうが、テキーラはアルカサル島の城砦都市アルカサルを首都として数島からなる伯爵領の主要産業の一つで、飲めるものなら嬰児でもテキーラを飲め、と云うふうであった。もっとも全体に峻険な島で砂糖黍の畑は乏しく、原料は平地のある他島から持ち寄っている。

イタルはこの仕事を始めた十歳のときから十四歳になった今日まで薬のようにテキーラを舐めているのもこうした事情からだ。薬のように、と言うのは命を養う水と呼ばれているからである。

この仕事の旨みは他にも多々あった。彼はアルカサルへ出向くたびにシルヴィエ聖教の教会に寄った。聖教は本来、宗教の自由を認める稀有な宗教であった。これを基礎とする神聖シルヴィエ帝国が苛烈な専制と畏怖とを以て世界を制覇しようとしていることを思えば目家撞着でしかない対比だ。島民は天の海神を信奉する。漁民の多さを思えば当然だ。宗教は生活習慣であり、殉教するような宗教観とは異なる地平にある。壮大で理性的な聖教に抵抗なくイタルの関心が赴いたのも自然であり、呵責を覚える必要もなかった。

蒸溜所はアルカサルのトラバヨ区にあり、近くには聖教の教区教会があって、プラノ神父がいる。イタルは薄暗い小聖堂に入って毎朝ある神父の祈りと教説とを聴くことが好きだった。彼が聖教に心を赴かせた契機はその宗教が蔑視されていたからに他ならない。

世界の勢力はマル・メディテラーノを挟んで大きく二分されている。一つは南大陸の超大国マーロの勢力であり、もう一つが北大陸の神聖シルヴィエ帝国であった。世界の多くはそのいずれかに傾かざれば生きて行けぬ状勢である。パスタリャ伯爵家は南方系であった。よって聖教は肩身の狭い身の上であったが、公海の真央にあって南北交易による莫大な利を稼ぐ伯爵家としては原則あらゆる宗教を受け容れるのが建前である。しかし北大陸で武力行使による侵略で勢力拡大を続ける帝国は南系の諸国では常に悪しく喧伝され、善しとおもう領民は少数派であった。

だからイタルは教堂に入った。いつしか説教後も残り、じかに教えを受けるようにもなっていた。プラノ師も寛容な人柄から彼の向学心を愛でたのである。或いは師の炯眼がその頃から既になにかをイタルに見出していたのかもしれない。

もう一つの楽しみは暗い聖堂で見かけるイーリヤの敬虔な祈りの姿であった。彼女は附属の孤児院の出身でそのまま寡母として無償で勤める少女で、彼とは同じ年齢であったから、イタルはよく声をかけた。

その朝も同じであった。

「おはよう。イーリヤ」

「イタル、今日も神父様のお話を聴くのね」

「昨日は幾何学を習った。でも古代史の方が面白いな。詩学も好きだ。ホルマロウスの幾章かは暗誦できるよ。で、またお昼に寄ってもいいかな?」

「あら、サンチャゴお爺さんが待っていらっしゃるんじゃないの?」

「大丈夫。夕方までに間に合えばいいんだ。昨日持って帰ったのが残っているし、時化でもない限り、漁師は皆働いているからね。それにどうしても今日は長居するんだ。明日からしばらくは羊の世話を手伝わなくちゃならないから。叔父さんが怪我しちゃってね」

「まあ、大変。なにがあったの」

「たいしたことじゃないんだ。まあ、時間があれば後でゆっくり話すよ。あればね。それよりもここに来られないのが哀しいよ」

祭壇の傍で小さな石盤上の講義を受けた後、いつものようにイタルは孤児院の軒下に坐って前に広がる広場の往来を眺めながらテキーラを舐めた。教区教会がちょうど向こう側に見える位置だ。舐めながら幼い頃、父に教わった歌を口ずさむ。それはおまじないのような節回しで、憂鬱な響きの、単調で意味不明な言語によって謡われるものであった。イタルはそれを止める。イーリヤがパンを持ってやって来たからだ。

「今日はどんなお話だったの?」

「また幾何学さ。それから瞑想の大切さだね。僕には瞑想の才能があるって神父さんは言っていたよ」

「あら、瞑想に才能が必要なのかしら。信仰と、ただ努力とがあればだれにでも同じでなくてはおかしいわ」

「僕に言われてもわからないな。師がそう言ったんだ。ねえ、それよりあの馬車、ずっとあそこに停まっているね」

イーリヤの眉が曇った。

「どうしたの。気になることがあるなら教えてくれ。心配になるじゃないか」

「なんでもないわ」

「そうかな。車中は見えないけれども、まるで君を睨んでいるかのような気配を感じる」

「やめて、そんなことを言わないで、イタル。お願いよ」

「なぜそんなに怯えるの。やっぱりなにかあるんだね。教えておくれよ。だって、あの扉にある紋章は羅教のものじゃないか」

羅教は南大陸の有力な宗教の一つである。建前上は別として、島においても他の宗教に比べれば優越的な地位にあった。信者数も多い。

「しかもイーリヤ、高僧でなくっちゃ、あんなものには乗れないんだ。君も知っているだろう。それがなんで聖教の施設の前にずっと停まったままなんだ」

「きっと孤児院に関心があるのよ。聖教の孤児院は宗派を問わず、どんなこどもでも引き取るから」

「不自然だよ、そんな理由」

「そうかしら。あなたが考えることがすべてとは限らないのよ」

そう言ってくすりと笑う。

「ねえ、気にしないで、イタル。ごめんなさい、心配させて」

「考えることは常に必要だよ。そうでなければ」

「あら、それならあなたはどんなふうに考えるの」

「そうだな、無差別に孤児たちを養える資金源を疑っているとか」

「まあ、イタル、あなたはいつでもそんなふうに考えたがるのね。でも、すべては浄財から賄われていることは知っているでしょう。島にシルヴィエ人は少ないけれども、ここで成功して裕福になった人もいるし、シルヴィエ人の他にも聖教の信徒はいるのよ。

疑えば智慧はつくかもしれないけれども、幸せとは限らないわ」

「幸せであっても、愚かで現実の中では損はかりなら虚しいじゃないか」

「そうかしら。私は幸せであることの方が現実のように思えるわ。他人を凌がなければ生きられないのなら、生きて行く意味があるのかしら。神様が与えてくださった命なのに。生命とは言えないわ」

イーリヤは紛れもなく北方の、シルヴィエ人の特徴を湛えている。眩い皮膚の白皙、青碧の双眸は海、黄金を帯びた光の氾濫で燦々たる髪。また今日もイタルは眸が合う瞬(とき)、眼を伏せてしまうのであった。

それが微笑んだイーリヤを見られる最後の機会であったことも知らずに。

イタルが着くとアルカサルは大騒ぎであった。

「いったい、どうしたって言うんだ」

「処刑さ。ロザリー広場で聖教の娘が火刑に処されるんだ」

「聖教の娘だって、まさか」

路を駈け上った。狭い路地を抜けた。細い階段を上がる。人にぶつかる。群集をかき分ける。人ごみに割り込む。押される。体をねじりこむように前に出る。殴られる。気にしない。力まかせだ。広場に設けられた高い柵にぶつかる。そこを離れまいとしがみつく。どこが空か地面かもわからない。眼を眦が裂けるほどに瞠く。喇叭が高らかに鳴る。イーリヤだ。

彼女が牽かれ出て来ると怒号交じりの歓声が上がった。無責任な大衆の鬱憤、憎しみ、それは残忍で恐るべきものだ。庶民の憤懣や僻みや嫉み、辛酸と屈辱とを舐めさせられ続け、虐げられた人間の心にある捻じ曲がった復讐根性が咆えるのだ。冤罪であるか否かは問題ではない。溜飲を下げさせるのである。民衆にとって公開処刑は格好の見物、娯楽でしかない。司教が壇上に現われ、羊皮紙を括っていた紐を解き、罪状を読み上げる。

「以上のごとく汚らわしきその罪、あらん限りの淫蕩、姦淫の窮み、魂の堕落、信仰を辱め、人倫の道を逸脱し、神を侮蔑するその行為、汝の罪科は晰らかである。

よって罪人は罪を悔い改め、神への帰順を誓い、罪を贖うこの死に際し、偉大なる羅神に赦しを乞うて魂の救済を求めるか」

太い縄に縛られ、裸足で服も破れ、汚され、暴力の跡も晰かに蒼く腫れ、血を滲ませる細身のイーリヤが涙で燃える眼で毅然と応えた。

「なんと云う酷い、なんと云う恐ろしい悪しざまの言葉でしょうか。私はなんども訴え続けています、そのような罪を犯した憶えがないことを。でもどうしても聴いていただけませんでした。

なぜこのような目に遭わなければならないのか、私にはわかりません。なぜあなた方はこんな残虐なことをなさるのでしょうか、私にはわかりません。でももう、このようなことを言っても、全く虚しいのですね。私は虚しく殺されるのですね。

ただ次のことをはっきり言っておきます。

私は無実です。それは神が知っています。たとえ私が言葉を覆したとしても、事実は、真実は消えません。たとえあなた方の耳には私の言葉が聞こえなかったとしても。

そして今死なんとする私の最後の望みはただ一つです。私はシルヴィエ聖教の聖者イキに信仰の誓いを立てた聖教徒です。羅教の神に魂を委ねはしません。せめてシルヴィエ聖教徒として死なせてください」

「おお、なんと云う罪深き者よ。未だかつてこのような凌辱の言葉が神の御下で聞かれたであろうか。汝は永劫の罪苦を懼れぬか。

民衆よ、聞いたか。もはや酌量の余地もない。この者を地獄へ突き落とせ。神よ、ご照覧あれ。神は崇高なる極みなり」

蒼穹を背景にイーリヤは磔にされた。

黒い油がバケツ数杯分撒かれ、点火される。火炎が爆発のように燃え上がった。群衆の声はさらに烈しく、波浪のようにうねる。強い風のために煙が斜めに流される。この広場が選ばれるのは煙ですぐに窒息死させないための工夫だ。窒息死できなければ人間は炙られ続けることになる。人間は焼かれただけではなかなか死ねない。骨が露出するまで肉を炙られても死ねない。絶命に至るまでは凄絶な場面が繰り返されることになる。

彼女も炙られ始めは身をもぞもぞとさせるだけであった。それでもかなりの熱さを堪えているはずである。

だが炎が二m弱に近づくと縛られた手足を引きちぎろうとするかのように激しく上下に悶絶した。髪が縮れる。叫びが上がった。凄絶な表情。炎がイーリヤの足先に届く。もはや彼女の動きは常人のものではなかった。意識を失う。だが一瞬だけだ。あまりにも熱いために意識が戻る。その間一秒もない。意識が戻った途端、弾かれたように身を仰け反らせ、絶叫。凄まじい熱さで意識を喪失。飛び跳ねるように意識を取り戻す。狂ったように叫ぶ。これがいく度もいく度も繰り返された。人間の光景ではなかった。

イーリヤの着物一片が火の粉となって胡蝶のように舞いながらスローモーションでイタルの顔に落ちかかる。彼は右手で払った。そして叫んだ。周囲の人が嘘のように引く。

数人の刑吏がイタルを押さえた。彼は喉が干乾びても叫び続ける。押さえつけられても狂った

ように叫び続ける。仰向けに倒れ、絶叫は爆裂の哄笑のようであった。イタルは哄笑していた。砕け散るシンバルの燦々たる光の氾濫のような哄笑であった。嘲るような、媚びへつらうような、下卑て、理性を喪ったかのような凄まじい哄笑であった。唾液を垂らし、這いつくばるような、天翔け裂けるかのような、けたたましい哄笑であった。まるで残虐な蒼鳥だ。

炎が礫の尖まで上がった。

彼女の踵の肉が焼かれ、骨が露わになる。着物は雀け縮れたぼろ屑となり、髪はないも同然。もがき方も猛烈で、既に正気ではなくなっていた。それでもまだまだ死ねない。人間は骨が露わになるまで焼かれても死ねない。

火炙りにされる者の最終的な死因は心不全である。

イタルは気がつくとトラバヨ区の聖教の小聖堂にいた。わずかな蝋燭の光があるだけだ。眼の前でプラノ神父が両手に顔を埋めていた。獣のように叫び悶絶し、肉体そのものでしかなかった無残な死が脳裏にこびりついて離れない。

「なぜ」

イタルは泣き濡れた虚ろな眼差しで問う。悲しみであり、死と云う物理的自体への衝撃でもあり、激しい混乱と虚脱との収拾できない状態にあった。

「神父様、なぜこのようなことになってしまったのでしょうか。僕には、なにもわかりません」

悲痛な面持ちを起こして聖職者は応えた。

「私にもわからんのだよ、イタル。

一週間前、羅教の安邊州多司教(あべすた)が来られた。こう話された。

『余は多く若き男女を指導したくおもう。宗派のいかんを問わずだ。それが真の神の御心に適う。貴教の宗旨もそれに同じくはあるまいか。余は貴下のイーリヤの素質を愛でて是非、その芽を伸ばしたくおもう。どうか余に寄託する意思はござらんか』と。

私は異例のことではあるが、我らが宗旨は確かに仰るとおりである、期待に沿えるか否かはわからぬが、まずはなにより彼女の意思を伺ってみましょうと応えた。

その晩、私はイーリヤを呼んだ。その反応は意外なものであった。彼女は激しく拒絶したのだ。

『できません。神父様。ご厚意に沿えないことは誠に申し訳ないことと思いますが、どうしてもできないのです』

『言うことはもっともだが、しかしそうまで厳しく拒もうとは夢想だにしなかった。おまえならもしや向学の志から受け容れるやもと思っていたぐらいなのだが。それともなにか事情があるの

かね』

イーリヤはしばらく俯いて考えていた。

『いいえ。なにもありません。でもどうしてもそのようにはしたくないのです。お赦しください』

『いや、いいのだ。別に気にすることはない。司教には明日早速私から伝えよう』

そして伝えた途端の司教の反応も予想外のものであった。なんとも奇妙に顔を歪められ、どす黒く色を変えられた」

イタルにはおぞましい憤怒の表情がすぐさま脳裏に浮かんだ。そしてあの日、広場でじっと停まっていた場所の車窓を思い出したのである。あるまじき邪恋だ。しかも異教の娘に。電光石火にそう推察した。人の善い神父には高位の聖職者がそのような劣情を抱くことなど、想像もつかなかったのだろう。考え、内心で地団駄した。怒りとともに生命の炎が復讐と云う名の下に甦るのを感じる。烈しい衝動だけが占拠し、その情がイタルを奪った。

「司教がなにも言わず帰られ、その二日後、イーリヤが宗教裁判所に告訴された」

なんと言うことか、そう胸中に叫ぶと再び驚嘆が貫き、理性が呼び覚まされる。わずか五日で処刑にまで至ったと言うのか、あまりに見え透いた暴虐ぶりにイタルは呆然とした。絶大な権力にはなにもかもが可能なのだ。そして最後に権力を裏つけるものは暴力だ。金銭ですらない。暴力の前にはだれもが屈する。力だけがすべて。神父には学があるが、その学識は一向に現実の力にはならないものであった。ゆっくり魂魄が身体に戻り、自分に成って行く。

「私はなんども拘留所に通った。識者に意見も求め、弁護士も訪ねた」

有力者に頼むか、法律家に金を積むべきだったのだ。だがそのどちらも聖教の神父には不可能なことであったろう。冷酷なまでの自分を確信する。

「イーリヤはなんと言っていたのですか」

「なにも。ただ晰かな無実であることを訴えていた」

以前から言い寄られていたのだ。だから激しく嫌悪し、拒絶した。怯えていた。とても神父には打ち明けられなかったに違いない。そして邪恋の末に拒絶された司教は逆上した。同時にその卑しい性根からは様々な邪推が胸中へと熾り、嫉妬の狂情に堕した違いない。憎悪が身を裂くほど燃え上がる。

「で、告訴の内容は」

「姦淫だ。しかも邪教の逸楽に陥り、獣とまで交わったと」

ありえない、ありえない。心中の絶叫であった。

「そのような証拠がどこにあったのでしょうか。彼女を知る者ならだれにも信じられないでしょ

う。愕くべき冤罪です。神父様、ともかくも僕は帰ります。もう二度とここへは参りません」

イタルは立ち上がると決然と去っていった。

以来、彼は海鳥島に戻らなかった。アルカサルの浮浪児となり、軒下に眠り、羅教の眦羅呂侯教会を監視し続けた。安邊州多暗殺のためである。チャンスとナイフ、その二つを求めていた。刃物はどこか肉屋で盗むつもりでいた。買う金などない。

司教が華美な階段から下りて豪奢な馬車に乗るのをなんども見た。豪奢の鼻と首と顎とが袋のようにたるんで繋がったこげ茶色の皮膚の壮年の男だ。緋色に金糸の縁取り刺繍をした僧服で犀の革靴を穿いていた。金と象牙の仗を持ち、指はリングだらけ、首から下げた金の鎖にはルビーの巨石を嵌めた太陽の形の装身具をつけ、弓月の目で人を見下し、傲慢そうにゆがんだ唇。全身の血が逆流するのを感じ、逸る心を強く抑制した。焦ればやり損なう。歯噛みした。智慧を凝らせ、イタル、そう自身に言い聞かせ、日々が過ぎる。そう云う日中にあっても時折、あの光景が甦り、畏怖が襲った。人間と云うことの惨たらしさ、生身を持つことの恐ろしさ、イーリヤのあの獣のような死に方である。イーリヤが激痛のあまりにあのように身悶え、絶叫し、死すると云う事実の衝撃だ。

暗鬱に封ぜられ、なにも見えない日々の或る日、暇そうにオリーブの樽に肘をかけて街路を眺めている店主に声をかけられた。樽と同じような暢気な体型だ。

「イタル、最近仕事してないそうじゃないか」

どうでもよいことだ。

「飽きちまってね」

「おい、いつからそんな気楽な身分になったんだ」

「いつもそうだったさ。海鳥の島じゃ、まっとうに働く気なんかそもそもないのさ。海に行けば食い放題だ。酒だって椰子から造れる。羊は勝手に草を食っているし、ズボンはその毛で作れる」

「へえ、そんなもんかね。

ああ、そういやあ、こないだ奇妙な奴がおまえを探してたっけな」

イタルは眼を覚まされたようにどきりとした。面に表われぬよう顔の皮膚が蜥蜴のような瓦状の体鱗となったように空想してみる。

「なんだい、そりゃあ。心あたりがないな。詳しく話しておくれよ」

「見たこともない身なりの奴さ。この島は外国人だらけだが、それでも見慣れない風俗だったぜ。クソ暑いのに肩掛けつきの黄土色の長衣なんか引きずりやがってな。灰色の髪を長く伸ばして細かく編んでいてね、いく条かに垂らしていたよ。そこに色々な宝飾具を結んで吊るしているんだ。

双眸も灰色でね。眼の下に蒼模様の金色の刺青をしていたよ。やあ、あんなもの、はじめて見たね。

斉語（世界共通語）を使っていたが、たぶん南方系じゃないかな。啊伽土語（アカド）かコプトエジャ語訛りの雰囲気があって」

「司教はイーリヤを無辜の罪に陥れたことで復讐を警戒しているのだろうか。そのような配慮が彼に必要だろうか。少なくともこの島では。イタルの動きに気がついて捜させているのだろうか。考えにくい。そうだとしても異様だ。捜索者の姿形が島の者とは思えないことも気になる。汚い仕事を外国人に任せたとしても、目立ち過ぎないか。

イタルは他所にもあたってみて数件の情報を得ると相手の次の出現場所を予想し、逆に待ち伏せた。意外にも無防備にその男はやって来た。意外にも若い男で、二十歳になるか、ならないかぐらいに見えた。忍び寄ると会話は簡単に聞き取れる。

『ごきげんよう。このお店のパスタはうまいらしいね。ところで緋色の髪をした少年を捜しているんだが。いや、この島の人間じゃない。海鳥島で訊いたら、こっちに出てそれっきり帰っていないって聴いたものでね。そう、血のように濃い緋色の髪の毛をした男の子ですよ。

いや、見てなければ結構です。折角だし、パスタをご馳走になろうかな」

まるで普通の人捜しだ。まるで遠い親戚に頼まれて猫でも探すような暢気さだ。たとえそう装っているんだとしても、油断し過ぎではないか。

人の良さげな口髭のシェフが皿を出す。

「失礼ですが、外国の方は見慣れているつもりでも、お客さんのは珍しいお召し物ですな」

「国ではそうでもありませんね。学問僧は黄土色を着るのです。まあ、商人と違って我々の類は殆どこちらまでは北上しませんから、珍しく思われるのももっともですよ」

「やはり南の方でしたか」

「ユリアスと言います。ええ、スール人にしては珍しい名でしょう。ですが、コプトエジャでは古来皆北方人のような名のです。我らが国の人間が古代にノルテに渡ったと云う説を言う学者も国にはいますよ。私などにはどちらが先でも後でもどうでもよいことですが、愛国者の一部にはそういうことに意地になる者もいるようですが。誤った愛ですね。真に愛するなら国の名誉ために真実を重んずるべきであり、潔く謙虚であるべきです。自己側に固執するほど哀れで卑しく厭らしく、みっともないことがありましょうか。それこそ国の栄光を汚す者です。国家は精神の栄誉を以て世界に誇るべきです。昨今の力のない現実主義的政治家は私に言わせれば力なきゆえの惰弱な現実妥協主義者なのです」

「はは。なるほど。しかし現に虎狼のように現世の利権を貪ろうとする国がありましからな。そんな奴らに嬲られるままと云うわけにも行きますまい。したたかに国利を追わなければ莫迦を見ますよ」

「だからこそです。だからこそ神聖を重んじ、たとえ実で滅んでも名を残すべき、それが人間の道でしょう。畜生道に落ちて生き延びてなんの甲斐があるか、と云うことですよ」

「しかし家族や愛する人や護るべきものがあればいたし方ないでしょう」

「つまり国の他に優先的に愛するものがあれば、と云うことです。それを認めるならあなたの言うこともっともですよ。ならば愛国者と云う定義の概念を我々は変えざるを得ない。

いや、余計なことを敷衍しました。

まあ、話を戻せば、私もコプトエジャから北へ人が海を渡って文化が伝播したと思いますけれどね。何しろ、我が国はだれしもが認めるとおり、世界最古の王国であることが歴史学的に晰かとされていますから」

「コプトエジャ八千年、って云うあれですか。斉暦（世界暦。元は貿易商たちの間で通用していた暦）を五千年以上も遡る歴史をお持ちとか。いやはや、想像がつきませんな。

この島も古いですが、先住民時代を除けば、八百年程度ですか。十分の一ですな」

「しかし重要な貿易中継点ですから、列強の争奪に遭って、かなりの変遷を経た歴史と伺っていますよ。北の支配時代も相当長くあったようですね。建築物を見る限り厳しい北方様式が多い」

イタルはユリアスの論説に強く惹かれていた。これこそが自分の聴きたかった知識なのだと激しく感じた。開けっ広げな話し振りからもユリアスが撃退者とは思えない。不思議だ。さらにはもう一つ不思議なことを発見した。『素人パスタ料理　月の蟹』のテラスでペスカトーレを味わっているこの若者を見張っている者たちがいるのだ。

彼は店のある側の路地口から横目で監視していたが、彼らはその対角の位置にある路地に半ば身を隠して二人、ないし三人で帽子を深く被って様子を窺っているのだ。いずれも踝までの黒衣に身を包んでいるのは剣を佩いているからかもしれないとイタルは推察した。ユリアスが店を出ると黒い男たちも自然に動き出す。その後を追った。

コプトエジャの若き学僧はアルカサルで一、二を争う高級ホテル、サンタニスカタに入った。シエスタの時刻か、そう思う。素知らぬ振りで男たちを追い越すと、玄関口からエントランスを斜めに一瞥してフロントの係りが鍵を渡すために手を伸ばした位置を確認した。吊るしてあった位置で部屋番号がわかるからだ。イタルはすぐに狭い路地に曲がり、男たちが引き上げて行くのを見て今度はその後を追った。彼らは裏路地を複雑に廻り、汚い安宿に入った。出稼ぎの日雇い

がよく集まる場所だ。黒衣の者たちが入り口の階段を上る際、少しめくれた裾から剣の端が見えた。マーロ帝国の紋章があった。

イタルはその夜は用心のため、城門を出て大樹の上に眠った。なんども考えたが、わからなかった。翌朝も早く起きて司教を見張り続ける。再びそんな隼燥の日々が繰り返された。大海洋の真中で灼熱の太陽に渇喉を焼かれるような日々が。

遂に見つけた。司教は毎週決まった日に情婦を迎えるため、司教館に附属する禊用の小部屋に独りで入り、物忌みと偽って周辺にすら人が寄ることを禁じていた。そこは裏通りに直面していて、小さな通用口から上流家庭の女中を装った娼婦が出入するのだ。七首を用意しなければならない。そう思った。

彼はその日幾度か肉屋の前を行きつ戻りつしたが、隙がない。考えれば当然である。だが買う金などない。飯を食わずに港の荷担ぎをすれば二日で貯まる。禊室をにらみながらそう考えていた。そのときだ。

「やあ、実は君に頼みたいことがあるんだが」

いきなり肩を叩かれた。思念に入り過ぎて足音に気がつかなかったのだ。イタルは愕き慌て振り向くと、そこにいたのがユリアスで血の気が引くのを感じる。言葉が出ない。

「君がイタルだろう。顔色が悪いな。大丈夫かね。ここらあたりで一番の漕ぎ手と聞いていたんだが、病気ではないだろうね」

「僕よりもっと速い、大人の漕ぎ手がいますよ。しかしなぜ手漕ぎなのですか。帆船の方が速い」

「しかし高くつくからね。君ならこども料金だ。それに私は帆船では困るのだ。目立ち過ぎるしね、たとえ夜でも。

さあ、ともかくどうだね。私はネルソネ島に渡りたい。三セランを払おう。夜間割増料金を附加しての額だ。荷負人夫なら三日分だよ」

妥当な料金だ。ネルソネまで六㎞弱。十分できる。彼はユリアスの表情を凝視した。

「なぜ疑うのかね」

「少ないけれど、定期便があります。どうして漕ぎ手を雇うのですか」

「夜だからね。正規の船は終わっている時刻だ。つまり隠密で行動したいのさ」

「隠密で？　理由は訊いても話してはくれないでしょうね、隠密だから。でも僕が知ってしまいましたよ」

「口止め料も払う。こども料金でね」

そう言って微笑むユリアスをイタルは探るように見つめた。
「まあ、君の好きにするがいい。だめなら他に頼むから」
そう言って背を向けようとする学僧を呼び止めた。
「わかりました。引き受けます。時刻と場所を指定してください。舟を運びます」
自分でもなぜそう応えたかはっきりわからなかった。概ね金のためだが、奇妙な若者に惹かれている自分をも感じている。
夜は幸いの月明かりだった。波も囁きのようで、むしろイタルは妙な緊張を覚えた。
『いや、神経が過敏になって当然だ。これは異常だ。もっと自分にプレッシャーをかけよう。抜かりないように』そう独語する。
港から離れた場所、アルカサルの城門を出て東にある小さな入り江に船を運ぶ。知らず漕ぐ音も忍ばせるようになっていた。岩間に繋ぎ止めて待つ。しばらくすると声がした。
「やあ、来たね」
ユリアスが黒い影となって岩の上に現われる。意外にも彼が気配を殺す術を知っていることにイタルは気がついて愕然とした。自分は実は抜かっているのではないか、と。落ち着け、冷静に状況を判断しろ、そう自らに言い聞かせる。ともかくも海上でなら絶対に自分が有利だ。
「時間に正確ですね。まるで北の人たちみたいだ」
「そうでもない。ただ緻密なものは美しい、そう思っているだけさ。さあ、行こう。海賊なんかに遭ってもつまらないからね」
「よく御存じで。けれども最近は治安維持に熱心なんですよ、パスタリャは。人心が得られるし、商業も栄えて安定した税収も得られる」
「そのとおり」
舟は波間に進んだ。イタルは周囲を見廻す。追尾者はいないようだ。もしかしたらユリアスがあんなにのんびり活動し続けたのは追手を油断させるためだったのかもしれない。常に日のある時刻に限られた緩い行動を重ねる。そう云う意味だったのだ。イタルは唾を飲み込んだ。この男はなに者なのか。
ユリアスが気持ち良さげに語り出した。
「美しい月だな。古来、月は滅亡の暗示だ。凄月と云う言葉はそれに由来する。また静月とも言い、清月とも言う。君も沙漠の月を見れば寂滅の清らかさを思うよ」
「お国はそう云う場所だそうですね」
「ああ。砂と日干し煉瓦の国さ。石造りの建築に歳月が堆積され、埃と香油との匂いのように薫

じられる。だが沙漠はクリーンだ。ほんとうに乾き切った沙漠には細菌もいない。比べれば物理的な生命は黴のようなものだね。湿った場所に繁く生える」

「そうですか」

「ああ。人間の情念も固執も捨てれば沙漠の蒼穹のようになれる。イタル、復讐など止めた方がいい」

漕ぐ手を止めた。次にどうすべきか思案する。ここは海だ。いざとなれば舟を転覆させて泳ぐ。どちらの島へでも行く泳力はある。だがユリアスはどうか。長服では泳げまい。月光のみで方角を失わずに進めるはずもない。イタルから見て左手二百mにモンテ島がある。島とは言えない尖った岩の幾つかが海から突出ただけのものだ。そこにたどり着くくらいが精一杯であろう。油断しなければ絶対に安全だ。

「どうしてそれを。やはりあなたは」

「安邊州多の手の者ではない。君はそう考えたんだろう」

「半分はね。でも腑に落ちないことがあった。あなたは追跡されていたことに気がついていましたか。僕はマーロ帝国の紋章を見た。あの膂力の皇帝羅氾が専制する超大国だ。尋常なことじゃない」

「いや。しかし当然そうであろうと計算して行動していたつもりさ。ぶらぶら君を捜しながらもね。成果はあったよ。イーリヤの件には同情する。君が家に戻らぬ理由がそれでわかったんだ。案の定、司教の館を見張っていると君が現われたわけさ。恐らく安邊州多は夢想すらしていないよ。

ネルソネ島へ渡る話は実は作り話でね。君を海に連れ出すための方便だった。欺いたことを謝るよ。だがこれは君のためでもあり、多くの人に必要でもある。ともかくもよかれと思ってやむなく取った処置だ。赦してくれ。まさしく方便だった」

「しかし、なぜ。なぜ帝国に監視されるような人物が僕を必要とするのですか。きっと舟のためじゃない」

「お見込みのとおり。だがそのことは後でじっくり話そう。急に話しても理解できまい」

「そう言われては余計気になる」

「君には私とともにノルテに行ってもらう」

「冗談じゃない」

「復讐などしている猶予はない」

「あんたになくとも僕にはあるんだ」

「安邊州多を殺してもなにも解決しない。彼はこの世に幾百万人もいる。彼らを征伐したいならその本質を叩け。司教は現象に過ぎない」

「あんたはなにを言っているんだ」

「事実をさ。現実について語っているんだ。この世にどれほどの忌むべき行為があると思う。氾濫しているよ。人を欺いてまでも財貨を蓄えてなんら呵責を覚えない富豪者がどれほどいるか。弱者や貧者、きれいな水や樹木を護ろうとする有徳の人々を莫迦者扱いして排斥しようとする非文明的な暗愚の輩がどれほどいるだろうか。

また或る特定の事件に起因してその相手民族を丸ごと憎しみ、復讐を欲することは理不尽である。どう考えても現実に即していない。よって異民族を排斥する主義は誤っているが、もっと非道なのは損得勘定から、その行為への非難を阻止する非人道的で非民主的な国家元首である。彼らは様々な理由を叙べる。どこの国でもしている世俗の慣例だからなどと思い上がり、神の御前でほんとうにそんなものが通用すると思うのなら、彼らは幻影を生きる愚か者としか言いようがない。

神の御前では一切の形式的口上は剥ぎ取られる。真実が露呈する。彼らは今この瞬間にはそれが眼の前に立ちはだかっていないから、高をくくっているに過ぎない。イタル、考えてもみたまえ。自分の欲望のために内戦を起こし、罪なき人民を犠牲にする権力者、少年兵を使う者たち、独立運動を暴力で抑えようとする者、哀れな難民キャンプを容赦なく攻撃する者ら、虐殺やらレイプやらをした者たち、彼らがその行為を神の御前でもなんの畏れもなく、同様に繰り返せるかを。つまり私がこう訴えるから罪が存在するのではない。私がいてもいなくても影響はない。彼ら自身が自分の罪を知っている、だから罪からは逃れられない。彼らを裁くのは彼ら自身なのだ。どんなごまかしも通用しない」

ユリアスの論調は烈しさを増し、論説は止まらなかった。

「またそう云った暴虐者を非難しない権力者、協力する大臣宰相は同罪である。いったい大量殺戮兵器を行使する国家とその国家を政治的打算から擁護する国家は神の御前でそれが赦されると信じているのであろうか。また非道な為政者から命辛々逃れて来た難民を迎え入れなければ虐殺者と同じである。人道に照らして見よ、私の言うことのどこがどう誤っているか。それとも人道以上に重んずるべきなにかが他にあるとでも言うのか。

であるにそれを非難しない為政者は同罪である。国際的協同、地域的な安定などと称して言葉を濁している。笑止千万だ。

政治家的弁明はどんなに大目に見たとしても、人間界という業界内輪の馴れ合いであって、公

においては、真の現実においては、すなわち（世は神が創られたのだから）神の御前においてはなんの申し開きにもならない。神の御前ではありのままの事実があるだけだ。彼らは私を非現実的な、寝惚けたことを言う夢想者と呼ぶであろう。だがそれは全く逆だ。

私個人から言わせれば人道を損なうくらいなら国家が滅ぶ方がましだ。とは言うものの、確かにこのような考えは強制できない。だれしも生命・国家・民族・家族を護りたいと切におもうからである。だが私にしてみればこのぐらいの気概なくして生存するなど、ただの細胞分裂でしかない。

宗教・民族・国家・家族・生命、これらは全て人間の根幹に達する。歴史的な悲劇を顧みるまでもない。これらによって今もどれほどの不幸があることか。

侮辱された宗教、蔑まれた民族が復讐を誓うのは人間の自然な感情ではある。しかし復讐単位を民族や国家とするのはどう云うものだろうか。その宗教一般、国家一般を狙い、直截的には関係のない人々を犠牲にするならば実情に反してはいまいか。もしもそれが一定効果を狙って行われたとしたならばあたかも人命が方便の道具のようではないか。理由のある復讐であろうとも、相手を特定しなければ事実・実態に添うものとは言えない。私たちの人間理性が晰らかにそう語らないか。

私の言っていることに一毫の誤りでもあるだろうか」

イタルは言葉を失った。考えがまとまらない。むしろ笑い出したい気分だった。これは夢か。それとも冗談か。

「それが僕になんの関係があるのか。あなたのお説教は論としては一見もっともだが、僕には空虚だとしか思えないし、アルカサル島を離れる気もない」

「ふむ。確かにそう言うのも、もっともだ。私は性急に過ぎたのだろう。

ところで君は父親の名を知っているかね」

「あたりまえだ。イサヲ、それが父の名だ」

「では祖父は」

「イオタだ」

「そうだ。北であっても南であってもおかしくない名まえだ。曽祖父はわかるかね」

「いや」

「私は知っている。君の曽祖父はイゾオだ。その父はイン。その父がイジン。そのまた父がイエウドゥ。そのまたまた父がイクヴォーン。その父親はイクシュバ。そのまた父親がイヴォング。そのまたまた父親がイクシュヴァグだ。彼はシルヴィエ聖教の大枢機卿ヴィヴィドゥの次男で究

教枢要院の大神官であった。イクシュヴァグは父の提唱した宗教改革に随動した。ついには帝国の趨勢をも掌握したが、保守派の巻き返しに敗れ、次期神聖皇帝とまで言われたヴィヴィドゥは失脚、大枢機卿が宗教裁判の末、地下牢に繋がれ、獄死と云う前代未聞の事件となった。これが世界史上に有名な『ヴィヴィドゥ・イクシュヴァグのシルヴィエ聖教大宗教改革』だ。息子や娘たちは辛くも国外逃亡し、流浪の身に落ちて、世界に散った。

斉暦にして二四五二年のことだ」

「信じられない。僕の祖先が。しかし彼らはなぜ亡命できなかったのだろう」

「どこの国にも受け入れられなかったのだ。あまりに帝国の力は強大であったからね。その時代にマーロ帝国があったなら状況は違っていたかもしれないが。君の祖先は次々と発見され、惨殺された。直系の祖だけが転々としながら生き延びた。事実上、イアレズヲ家はシルヴィエから廃され、六つあったうちの一つの大枢機卿家が消滅した」

「信じられない、信じられるわけがない。だがそれが今さらどうだと言うんですか。そもそもあなたにどんな関係があると言うのですか」

「イクシュヴァグはその青年時代に世界最古の文明を誇るコプトエジャに留学していた時期があった。彼はコプトエジャ宗教界の最高神官ヌーズ・パイ・シザルの家に滞留していた。それが私ユリアス・フト・シザルの祖先の家なのだ。

少しはわかったかね」

「全然わからない。なんで今さらそんな昔話が蒸し返されるのか」

「昔話ではない。目前にある危機だ。ただし私も短絡に君に告げてしまってよいものか迷っているよ。君を見極めて、決意を確認してからでなくば」

「なにもわからないのになにを決意しろと言うんだ。シルヴィエに行ってもう一度宗教改革でもしろと言うのか」

「ふ。確かにそうだ。君の言うとおりだね。ならば」

そのときイタルは帆を張った黒い船が凄い速さで近づいてくるのに気がついた。余りに衝撃的な話に夢中になり過ぎていたのである。

「やばいよ、ユリアス」

「ん？」

「海賊だ」

モンテ島はかつて海賊の寄港する場所と呼ばれていた。

「ふうむ、おかしいな。そんな連中がくるはずではなかったんだが」

「なにを言っているんだ。来るはずもなにもあるものか。現に百ｍの間近に迫っている」
「そう云う意味じゃない」
灯火のない暗黒の船は巧みにロープを投げてイタルの小舟の舳先を捉えた。
「やい、おとなしくこっちに上がって来い。さもなくばドテッ腹に風穴を開けてやるぜ」
パーリア語であった。もともと北大陸のノベアル帝国がアマーリャ諸島を統治していた時代にパーリア島に総督府を置き、その言語が諸島の公用語とされた四百年余り続いた。以来、現代に至るまでパーリア語はアマーリャの共通言語として生き続けているのだ。世界全体で見れば各語（バナ・サンクト語）は教養のある人間しか使わない。アマーリャのような大交易地帯では学問のない者でも覚えるが、全体では一割にも満たない。ちなみにイタルのエル・パッハロ・デル・マルやアルカサルは土俗語のドラヴィド語と最初の渡来人のマガディア語とが地元言語で、イタル自身もマガディア語、パーリア語、そして各語とが使える。
声の主はどうやら銃を持っているらしかった。影でしかないその荒ぶる輩は後にいるだれかを振り返って問い掛けた。
「おい、こいつらはほんとうにお宝を持っているんだろうな」
すると後ろから新たな声が応える。
「貴様の部下がサンタニスカタから、そいつが出てくるのをチェックしているんだろうが。とぼけるなよ、貴様みたいな奴が俺の言葉だけを信じてうかうか話に乗るはずもあるまいに」
それを聞いてユリアスがニヤリとするのをイタルは見逃さなかった。海賊大将が喚く。
「やい、でかい口叩くな、用心棒風情が。俺様の船に便乗させてやっただけでもありがたいとおもえ」
「そうか。しかし俺は善良な情報提供者つもりだがな。ともかくお宝が世界の至宝であることは間違いない。奪えよ」
ユリアスが肩をすくめて小さな声でイタルに言う。
「やれやれ、そんな大事な情報を漏らすなんて。どうやら彼は海賊どもを生かして帰す気はないらしいね。
さあ、急ごう。向こうに渡るんだ。そのロープを手繰ってくれないか。船べりにくっつけてくれ。濡れてしまうからね」
イタルは唾を飲み込んで言うとおりにした。どうやら状況の実際は目に見えているとおりではないらしいと思いつつ。船に上がると賊の頭らしい先ほどから怒鳴っている男が立ちはだかる。藁のような髭を蓄え、眉の濃い、精悍な背の高い男であることが月光で見て取れた。ユリアスに

向かって言う。

「さあ、聞いてのとおりだ。出してもらおうか。コプトエジャの貴族殿。お忍びなのはこっちはとっくにわかっているんだ。抵抗すれば鮫の餌だぜ」

『どっちにしろそうするつもりだろう。我が家まで身代金の要求をする気もあるまい」

「へ。ほざくな。この状況で身分がなんのお役に立つのかね。てめえらみたいな奴らを見ているとな、虫酸って奴が走るんだ。地位に頼って気取っていられるのも今のうちだぜ。ほんとうの現実ってものを教えてやろうさ」

すると賊頭の背後にいた人の塊から一人の男が進み出た。

「さあ、そろそろ三文芝居は終わりにする」

用心棒風情と呼ばれていた男の声だった。イタルにはなにが起こったかわからなった。余りに速過ぎたからだ。海賊の首領は叫びとともに倒れる。電光石火で抜かれた剣に斬殺されたのである。目にも留まらぬ抜剣であった。

『用心棒風情』の男が後ろを振り向いて囁く。

『どうした。声も出ないのか。恐れを知らぬ荒くれ者諸君。ボスが斬られたようだぜ」

一斉に声が上がる。屍骸が重ねられるだけだ。

『どうか命だけはお助けを」

海賊の一人がひざまずいて手を合わせる。

『蛆虫が。おまえはそう命乞いをした人間を幾人殺してきたのだ。自分の番がきたときは赦されるとでもおもっていたか。

殺された者のように死ね」

男は鞘に収めると手についた血を革鎧の胸になすりつけた。斉語で言う。

『讃えあれ、ヴォードは我が脈管に非情の血を分け与え給えり」

ユリアスが歩み寄った。

『相変わらずだな、〆裂(いれつ)。君の迎えの船はこれかね」

「いや。予定外のトラブルがあってな。こいつらにご協力を願っただけのこと」

「お宝を餌にして欺いたわけだ。その実像を知ったらさぞがっかりしただろうな」

『欺いたことを顧慮する必要などない。

こいつらが今までにやってきたことだ。因果応報。俺は人命を尊重するがこいつらは人間ではない。ユリアス、人間の価値は生まれや育ちではない。行為で決まる。人に非ざる行為をした者は自らの意志で生命を放棄したのだ。人間であることを自ら放擲した。こいつらには人権など既

にない。蛆虫呼ばわりして蛆に申し訳なかったと後悔しているところだ」

「ヴァルゴ教にふさわしい考え方だ」

「天神ヴォードに栄えあれ。俺が帆を扱う。良い夜だな。風も波もは安定している。言うとおりに舵を取ってくれれば十分だ」

「イタル、彼がリヴォアの海軍中尉、〆裂だ」

「今は退官の身。しからばただの〆裂だ」

イタルは無造作に黒髪を波打たせている退役軍人を恐ろしげに眺めた。背はイタルぐらいであったが、強靭な骨格が丈長い服からも窺える。しかしまだ若く、けして厳つい身体ではなく、むしろ痩せて見えた。澄んだ鋭い眼光、細面で顎が尖って鼻筋も細く高い高貴な顔立ちだ。生まれが良く、士官学校を出ていたとしたら、元中尉とは言え、二十歳くらいだろう。イタルはそう推測した。リヴォアはアマーリャ諸島よりも北にある西サヴォン諸島のスパルタ国家である。それも彼は承知していた。地理学は無駄ではなかったのである。

ユリアスが言った。

「さあ、イタル、君も手伝ってくれ。次の新しい友達が待っているよ。パスタリャ領の最北端ズォツア島に勤務する収税官吏だ。〆裂が紹介の労をとってくれる」

〆裂が不思議なものを見るような眼でイタルを見て呟く。

「彼がその少年か。俺の祖父はイゾヲの弟子であることを生涯誇りにしていた」

「それよりも〆裂、いったい君のクルーザーはどうしたんだ」

「どう云うわけかな、今朝、俺が港に向かうとマストがへし折られていた。夜のうちに斧でやられたらしい。警告ってところだな。まだ俺を直截襲うべき段階ではないと慎重に考えているらしい。

すぐ知らせにアルカサル へ行きたかったが、断らかになに者かに大きな損害を加えられたと云うのに当局に届け出ないんじゃ全く不自然ではないか。疑われてはまずい。かくして見たとおりの勧善懲悪に至ったと云う次第だ」

ユリアスがうめく。

「なんてことだ。

とすれば彼らはアルカサル港で待ち伏せて、私とイタルとが待ち惚けしているところを捉えるつもりだったのだろう。イタルの舟で入り江から海に出るとまでは考えつかなかったのだ。もしそうでなければあの海岸でつかまるか、ここで襲われているはずだ」

「やはり帝国の手の者でしょうか」

イタルが不安げに訊ねる。
「ほう、そこまでユリアスが話したか」
「いや。彼は勘がいいんだ」
「祖先のごとく明智があるのだろう。イゾヲは賢者であったと聞く。ともかくもマーロの仕業には違いない。かなり動きは調べられていると思うべきだ」
ユリアスが真剣な表情でイタルに向き合った。
「どうするかね。事態は思ったよりも急を告げている。意志を訊こう。君が決めていいんだ。強制はしない。命に関わるかもしれないからだ」
瞑目して呟くように言う。
「今さらなにを。もうどうしようもなくなっているじゃないですか。帰らせてもらいたい、そう言いたいけれども、それは危険な選択だ。僕が直截襲われていないことからマーロ側では僕のことを特定できていないと云うことがわかりますが、この件に関わって僕のような人間がいると云うことは既に知られてしまっています。今後見つかる可能性は十分にある。家に戻れば親戚を巻き込むかもしれない。ならば僕には家族がないのだから、このまま一人で島から消えてしまった方がいい。とすればあなたたちと一緒にいた方がましだ。もっともそれも詳しい事情を聞いてからじゃないと決められない。なにが起こっているか、現状が知りたい。教えてください」
「もちろん、そのつもりだ。聞いてくれたまえ。さて。どこから話すべきだろう。まず君は聖教についてなにを知っているだろうか……」

白い岩層を見せつける険しい丘、その下を大河ロヲホランが悠々と流れる。
イクシュヴァグ聖修道院は丘の頂にあった。花崗岩を重ねた灰褐色の組石造建築は窓が少なく、石葺屋根を持つ典型的なロマネスク様式の建造物である。普請（ふせう）は旅笠をもたげてそれを望んだ。四輪二頭立て豪奢な馬車に乗っている。礼装の田舎紳者は登坂路に苦渋する馬に鞭をやりながら呑気に話し出す。
「いや、男爵様。実際、今年は雪が多うございまして。今はそら、春めかしておりますが、ほんの先週まででございますよ、この路なんか、なんとも難儀したものでした」
聖イトトキヱの庵があったと伝えられる場所に建立され、斉暦九三八年以来、人々の崇拝を受け続けており、ロマーヌ地方における教学の枢要でもある。

「ふん」

普粛は鼻梁を鳴らして応えるのみであった。

あらかじめ書簡箋を飛ばしておいたので院長の執務室には速やかに通される。

「残念ながら」

短い純白の髪と穏やかな眼差し、重厚な面持ちに大きな瘤のような鼻、柔和な唇の笑みの聖職者はいかにも同情に堪えないという表情を作った。

「昨日の急なお手紙でご照会を戴きました件につきましては、当方にそのような文献はなく」

切り揃えた髪を肩に揺らし、男爵は上品さを損なわずに詰問する。

「古の大枢機卿ヴィヴィドゥの唱えた改革論は聖教の原理原則に帰れと云うものでした。私の知る限りで言えば古典の中には、妄執をなくせ、たとえば華が咲き誇り、枯れ、種を落とし、それが実らなくともこれを惜著するなかれ、と云うものがありました。自然に帰れ、と云うものであった。偉大なる貴教の聖祖の教えとは本来そうものでした」

「いかにも。よく研究されておられるようですな。それがなにか」

「聖者イキの固有の教説は或る種の現実主義であったようですね。一端が貴国の文化に残っています。お国かこれほどまでに他国を圧して科学技術を進歩させたのはなによりも実態実情主義に基づいた合理的科学主義の認識があったからです。他国のように蒙昧に閉ざされ続けなかった。ご覧なさい、未だ軍の一部にしか銃が行き渡らず、弓矢や剣を主として戦う国が多いことを。比して貴国では既に銃砲を装備した自動駆動車輪を持つ自走式装甲戦車が数千台あるのです。これも聖教の特性の現われ、その一端ではあります。ただし多くの聖者の例に洩れず、貴教の聖祖も自ら経典を綴り、編纂することがなかったため、その教義の正確はえられていない。しかし斉暦三世紀の司教にして神学者であるアヴグストイの口述書によれば、

『全ては人間に観ぜられるまでのことに過ぎない、それが第一定義である。次いで一切の事象は空である。なぜなら我々は本質を観ぜられるが、本質を捉えられないからである。我々は羊を識る。幾何学上の円を識る。だがそれがなんであるかを根源から説明できない。一般に説明と思われているものは別の言葉に置き換えているに過ぎない。我々はその置換によってその差異に慣れ、擦り馴染ませることで納得と云う心的現象を起こす、そのように創られているだけのことでしかない。一切の事象は我々に実存的に観ぜられるがままに従う限り存在を做すが、意義を做さないものであり、我々にとっては空である。しかし客観的事実ではなく、飽くまでも我々に観ぜられるまでのことでしかない。これが第二定義である』」

「失礼だが、それは拙職の熟知せる範疇であるが」

「すなわち第二定義は『よって固執の義務はない。もし執着が様々な苦患を生むのであるならば捨て置くことに支障はない。すなわち自己利得、自己保身と云う狭陋の殻を逸脱して、広く一般感覚を成就し、妄執を祓い清め去れば惜情なく清爽たりて自然へと帰るのである』

この原理原則を全うするのが、大神官イクシュヴァグの建てた聖域に勤める者の義務ではないでしょうか。

しかるに貴殿は保身のために真実を蔽い隠しておられる」

「おお、拙職には聞き慣れた事柄を長々しくも敷衍されたかと思えば、またなんと云うことを仰せられるか」

「イクシュヴァグは貴修道院を建てられた。彼自身、ここで瞑想を行ったと聞いています。彼はここに自らの家系の系譜図を持ち込んだはずです。それを研究しようとしていた。なぜならその図によれば、イクシュヴァグのイーノ家の祖先であるイヴィンは聖者イヰの縁戚者であることが記されていたからだと考えられます。

冷静な彼はそれを学問的に耐えられるよう証明すべく計ったのです。

しかし改革の失敗による失脚がそれら計画を全て頓挫させてしまった」

「なぜそのような大胆なご発想があるのか、驚くばかりです。

それは事実ではありません。大神官がそのような研究をされたと云う記録はなく、少なくとも拙職はそのような話を、たとえ逸話としてでも聞いたことがありません。全く以て耳を驚かす異端の考えです。聖祖は天涯孤独と伝承されております。父も母もなく、神の子として現われ、人の子としては生まれなかったのです」

「しかし私のような異教徒にはそう云った考え方はあたかも本来の貴教の宗旨に背いておるかのように見えます。すなわち聖者の精神である現実主義を無みしているものと。さらにその上、敢えて申し上げれば、貴殿が仰られたような現在一般に貴教内で行われているそのような解釈は貴教の原理原則に反し、以てヴィヴィドゥ大枢機卿が、イクシュヴァグ大神官が生命を賭して敢行した宗教改革に叛くものであり、貴院創建の精神にふさわしからぬお考えである、ともおもわれます。

失礼とお怒りとを被ることを敢えて承知でもう一言申し上げましょう。

すなわち貴教も多くの宗派の例に洩れず、教派の発展に伴い、一定の現象が見られます。まずは教祖を神格化して貴教の権威を高めた。その当然の結果として事実を曲解し、教祖の伝記を非現実的なものとした。そして終には聖教を絶対至高とし、御名の下に他国他民族を覇することが大義あるものであるとし、それを正当化するに至った。これが現在に至るまでの貴国の姿です」

「お言葉が過ぎるようにも思いますが、まあ、一国の行動には様々な批判がつきものです。そのような解釈もありえましょう。しかし解釈とは常に」

「お国に公認された見解以上の見解を貴殿から求めることは所詮、無理難題なのでしょう。貴殿が系譜図の存在を認めようとしないのもごもっともなことかとも思います。

確かに貴教においては、聖祖イキは天涯孤独であり、どこから来たかさえ知られていない、或る日突然、北大陸北東部カヴァリア地方にある辺鄙な寒村シルヴィエに現われ、人々がたちまちその清爽で神聖な雰囲気（現実的には流浪生活でかなり汚れ、髪も髭も伸び放題、服も破れ、貧相な身なりであったとは思いますが）に畏敬を擁き次第に周囲に人が集まり……ということにはなっておりますが」

「拙職もそのように考え、そのように信じております。身なりは別にして」

「しかし余りに非現実で私には反って教祖を貶めているとしか思えません。私たち異教徒には。客観的立場から顧みさせていただけば彼の大枢機卿や大神官が為したことは全く以て正義であり、貴教が優れて明晰であることを印象づけます。翻って考えればそれも当然のことなのです。ヴィヴィドゥ・イクシュヴァグが原理主義を唱えた根幹には、シルヴィエが誤った覇業主義に陥っていることを憂いてこれを矯正し、教祖の美しき教えを復活させる、と云うことが一つにありました。それが異教徒の眼に明智明徳と映えてあたりまえではないですか。

なおも留意すべきは、偉大なる大枢機卿や偉大なる大神官の改革根幹には本来の教えと云うものがあった。彼らは自らの案出した思想を以て改革を行おうとしたのではない。改革論にはなによりもその依拠すべき事実の発見、科学的な根拠があった」

「しかしいったい、なにを以てそう仰られるのか。見当もつきませんな」

「古シルヴィエ語で綴られた『エレミア文書』です」

「おお、それは悪魔の書いた物ですぞ。エレミア派は最悪の異端、しかも最悪の異端です。あれが人々に信じられれば人間社会は根本を覆され、崩壊する。なお今日もわずかに信徒がいると聞くも、本国では殆ど存在しません。皆無と言ってよいでしょう」

「いいや、エレミア派は宗教改革の真の継承者です。そもそも貴殿は当該文書をご覧になっているはずがない。むろん、私もだが」

「そのような書物が見る必要はない」

「まるで無知蒙昧な蛮族のようなことを仰ります。いつの時代も迷信が支配している。常に現代は過去を嗤うが、だれも時の権威が主張する説を鵜呑みにしているに過ぎない。自ら確かめたわけでもない。迷信となにが変わるのか。

信じ込まされたことを信じたがっているだけだ。『エレミア文書』の正統性には科学的根拠がある。貴殿も知っておられよう、帝都ヒムロバウログの聖教大総本山ヴァリシリシィ大聖堂に砕いた朱石を樹脂で練った顔料による聖者イヰ直筆の署名が記された石盤のあることを。それと同じ署名が『エレミア文書』にはあったとコプトエジャの古文書に伝えられています。まさしくイヴィンが血縁者だからこそ所持できた文書なのです。イヴァンがイヰの親戚であることが晰かにされ、文書の書名が確認されれば原理は甦り、事実主義は復活し、改革が正義であったことは完うされる」

「失礼だが、男爵、あなたはなぜそのようなことを調査されておるのでしょうか」

「ただの興味ですよ」

「しかしながら大変危険な研究だ。拙職の当局への言い方一つで死罪すらありえますぞ。もしあなたがラグテレク伯爵のご紹介でなかったならば、拙職は当然の義務を果たさねばならぬところです」

「私は異教徒です。しかもノルテに住む南方系の貴族です。全く関係がない、純粋な興味でしかありません。ご安心されたい。少なくも貴殿のご迷惑にはならぬよう慎重に取り計らう考えもあります。

お時間を取らせました。では」

「今日はどちらへお泊りですか」

「むろん、国境を越えて伯爵の湖上城に戻りますよ。そうでなければ身の安全が保障されませんから。貴殿を疑うわけではありませんが」

「まさか。たとえ帝国であろうとも、湖上城の主を軽んじることはありません。ボロジノ条約は絶対です。我々は軍馬を交えず、双方の生命・財産を保証するのです。しかしそれ以前に伯爵の顰蹙を恐れぬ者もおりますまい」

「ふ。まさしく世は力で動いておりまするな。これも一つの現実主義です。貴教の原理は全く義しい」

普蕭は暇乞いをすると、待たせていた馬車に乗り、丘を下った。川沿いを進み、架橋を渡り、森を抜けていくつも低い山を越えると、やがて険しい登坂路に入った。既に夜になっていた。山小屋で待っていた伯爵の馬車に乗り換えた。条約により親書を携えた伝使の者以外、両国は騎馬に国境を越えさせぬ取り決めとなっていたからである。駅者は打って変わって鉄仮面のような厳粛な無表情の武装戦士に替わった。

さらに急阻な路を登る。かつては火山であった峻険な山嶽であった。荒んだ涸れ地に高く月が

昇る。やがて頂上に達した。唐突に視界が開け、壮大な光景が望まれる。

外周九㎞余りの噴火口は水が溜まり、湖を做していた。所謂カルデラ湖である。鏡のような死寂を呈するその中央には月光に照らされ、白く泛び上がる城があった。デモスの大岩の上に建ち、湖面からは二百mもの高さになるエレニナの塔を中心として数多の尖塔がともに天に向かい、伸び上がるかのように聳え、全体で一つの剣をであるかのような奇観を做していた。

『神々の黄昏（ラグナレク）』と呼ばれるフロランソワ・オスカ・デュ・ヨルグ伯爵の居城、湖上城である。

その晩遅く、大食堂で厳めしい顔つきの装飾に囲まれ、普粛は伯爵とともにする晩餐の席にいた。暗いために高い天井は見えず、四方の壁も陰って見えない。長大な橡製のテーブルは他の全ての家具や装飾と同様に厳めしく暗鬱であった。そこに置かれた大きな燭台には数多の火が灯るも、陽気さや寛ぎの欷片すらもない。

普粛はフォークを持つ手を巧みに動かしながらその日のことを語っていた。

「思うに」

黒檀製の椅子の背もたれは立ち上がった大人の背よりも高く、怪獣や悪鬼羅刹の像が彫られ、頂上には来賓の紋章が飾られる習慣であった。

「あの修道院長とて全く嘘を言ったものでもないでしょう。系譜図について言えば、そのような危険なものは早々と手放されたか、または滅却された可能性が高い。手放されたとすればコプトエジャだと考えます。大神官イクシュヴァグは留学の時期がありましたから。その答はじきにわかるでしょう。さる方からシザル家の者を紹介されております。彼がなんらかの協力をしてくれるでしょう。いや、その男は大貴族の家柄ですが、庶子でね。必ずしも体制的な考えではないのです。情報漏洩の心配はないと、さる方も保障しておられます。しかし実に見事ですよ、このオマール海老は」

青紫の斑点のある甲殻を剥がし、身肉を口に含む。香り高い汁が口腔を充たした。

「伯爵はよほど機能的に優れた駅逓をお持ちのようですね。このような内陸の、言って宜しければ辺境地、護るに堅い険阻な要害の土地に、このような新鮮な素材が届くとは。まるで魔法があるかのようです」

そう言って伯爵の反応を抜け目なくうかがった。長く膝まで垂れたまっすぐな白い髪の伯爵はまだ少年としてもよいほど若いが、淡い紫の眼差しに鋭利で高貴な顔立ちで、相も変わらず冷淡な、全くの無表情のままであった。

「いや、それはともかくも、かくも厚いおもてなし、感謝に堪えません。私のごとき弱小国ユヴィンゴ連邦の一介の貴族が希う一通の書簡箋にこのようにお応え戴きまし、紹介の労を取って戴

けるなど、実際、夢にもおもいませんでした。実に神聖帝国のなすがままとなっておりますこのノルテにて貴下領国のごとく軍事規模においては（またしても失礼を申しますが）遙かに劣勢ながら、周辺全て帝国とその属国とに囲まれつつも、独立を保つ奇跡、まさしく貴下の天才叡智の成せる業、神通力のごとき威力としか申し上げようもありません。

今日無事にシルヴィエ帝領内に入り、望むままイクシュヴァグ修道院を訪れられました。これ一つが遂げられました上は、私包み隠さず伯爵に打ち明けてご協力を願いたい旨がございますが、お聞き願えますでしょうか」

ラグナレク伯爵は白皙の皮膚を微動もさせず冷然と沈黙で応える。普蕭は否応があろうはずはないと踏んでいた。ユヴィンゴの貴族である自分が敢えて神聖帝国内で動きたいと仲介を願うからにはそれなりの陰謀があると察し、必ず興味を示すはずであると。シルヴィエを揺るがすためならばこの大貴族が（実質的な協力を実行するかどうかは別にしても）触手を動かさないわけがない、と。しかし裏切られる可能性はないとは言えない。帝国を露骨に敵に回すことを避けるかもしれない。いや、この男は既に充分帝国の顔に泥を塗り続けているのだ。その不思議な力で圧倒的武力に勝る敵を翻弄し続けているのである。これは賭けだ。だがもはやそれしかないのである。

「我が国には革命の兆しがあります。ご存じのように我が連邦は斉暦の二七一七年まではバロクワ家の王政による統治でした。労働者たちとそれを支援する貴族ら（私のように民族的に差別を受けていた貴族は貴族であっても民衆の蜂起に同調したのです）による武装蜂起が勃発して首都モスコクールの会議堂を占拠、選挙による国民会議の発足を王家に要求し、それが地方に飛び火、国内が内戦状態に陥ったとき、隣国ボワロンド（言わずと知れたシルヴィエの属国です）を経由して神聖帝国が介入、圧倒的軍事力を持って制圧した後、調停者として監督府をモスコクールに置き、王エフロペア二世を強制的に退位させ、王政を廃止、シルヴィエ主導の国民会議を発足させ、民族ごとに各州が国家体制を組むことを決議（ユヴィンゴは多民族国家で民族間の争いが絶えず、バロクワ朝の時代にも幾度も紛争が熾りました）、連邦国家を成さしめて帝国の傀儡政権である連邦政府を樹立、事実上の属国としました。にもかかわらず、依然として監督府は存続し、総督ゴルダヴィの指揮の下、労働者階級への圧迫は日に日に強まっております。しかし」

ラグナレクは卓上にあった陶製の小さな獅子像を倒した。それは獅子が跨ぐような形で食事開始前にナプキンを押さえていたものだ。普蕭は唾を飲み込んだ。

「しかしながらです、民衆の間ではこの九年間で地下に反シルヴィエ運動家が集まり、革命の機運が高まっています。スールの超大国マーロに密かに通じて武器を密輸（皇帝羅泡は無償でそれ

を提供するのです）し、準備は進められておりますが、当局の内偵は驚くほど緩い。恐らく帝国はそれを待っているのです。再び民衆蜂起が起これば完全制圧によりユヴィンゴをシルヴィエ領にする、そう云う魂胆なのは明らかです。しかし民衆の怒りはもはや止めようがない」

普蕭は言葉を切り、ラグナレクの反応をじっと見守った。相変わらず凍ったような無表情である。汗が滲む。最初から全てを言うつもりはなかった。様子を見ながら徐々に進める腹であった。しかし相手は既に情報をつかんでいるのだ。先刻の行為でわかった。知っていると云うことを伝えるためにわざとやったことなのだ。

「この危機的状況を転換すべく私の仕掛ける計画を持ってそれを実行しつつあります。それはシルヴィエの皇帝を我が国に友好的な皇帝にすげ替えることです。驚愕天地の回天の策ですが、既にあなたはさほど意外に思われないでしょう。驚嘆すべき力をお持ちのあなたです。既になにかをつかんでおられると察しました。

しかしいずれにせよ、伯爵、この計略は我々の側にもっとも重要なキーポイントが握られています。この計略はあなたの国家戦略上にも非常に有効であるはずだが、そのためには我々と協同するしかないのです。

我々はあなたとの共闘を欲します。マーロとの交渉の仲介にもなっていただきたい。そうすれば我々は使い捨ての駒にならず、生き残れるから。遠く離れた超大国ですらラグナレクと呼ばれる伯爵を無碍にはできない。

伯爵、お救いください。貧困と暴力とに喘ぐ民衆たちを、不当に虐げられた崇高なる者たちをどうかお救いください」

ラグナレクが笑った。冷ややかな、口元が吊り上がっただけの笑い。顎をもたげ、眼は嘲り蔑むように見下す。はじめて口を開いた。

「約定は契られた。そうおもって戴きたい。

ふふ、楽しみにしているよ、男爵。

実際、そのとおりなのだ。

そのような表情をされるでない、男爵。

人間とは儚いものだ。実に弱い。

たとえばあなたは眼の病を持ったことがあるか。イリバシの医師が調合する薬は高価ではあるが、非常に上質で効能に優れている。だが悲しきかな、人はそれを眼に差すときにどうしても反射的に瞬きをしてしまう。これほど眼のために良薬であり、価格が高いにもかかわらず、自らの意志で眼に落としているものであり、それが落ちてくることがあらかじめ覚悟できているにもか

かわらずだ。

私も幼少の頃、そのようにして母を殺した」

そう語ってなにか贅沢なお世辞でも言ったかのように微笑した。

早蕨（さわらび）は仲間内で嘲笑の的となっているその習慣を止めなかった。寝床から飛び起きるとオリーブと月桂樹との油から作られた石鹸でさっと顔を洗い、下着（綿繊維が細く長く、絹のような光沢のある）を身に着け、絹のシャツに袖を通す。膝丈の上着を羽織ると大きなカフスをつけ、慎重にボタンを択び、木型から特注で作らせた鞣し革の靴を履いてアパートの外へ出た。理髪店に入ると既に陶製の容器に豚毛で泡を立てて待っている口髭の亭主は馬革のベルトで剃刀の刃尖を調整し、上品な笑みを作って両肘を上げ、うやうやしく早蕨の頬にあて始めた。ハサミで軽くモミアゲや襟足をそろえ、十五分。次はカフェでの朝食だ。砂糖を入れないコーヒーを飲みながら新聞を開き、グワヴァ産の葉巻をくわえる。郵便局員が配達に来た。彼はいつもここで受け取るのである。

蒼穹を一片の白い雲が悠々と東へと向かう。

港町サンタレガリオは北大陸のフィオーレ共和国、今日も上天気だ。裂南北大陸海洋の碧も燦めくように美しい。その名からもわかるように彼もまた北に住む南系の人間だ。ディルフィノ区は南方系民族の居住域である。

隆臥（たかふし）が相席に坐った。早蕨とは全く異なり、貧相な身なりだ。髪には櫛も入れず、毛糸編みの帽子をいつも被って済ましている。無頓着なのである。

「

神聖帝国シルヴィエの首都ヒムロバウログは永久凍土地帯との境、限界点に望む厳寒の地にあり、シルヴィエ聖教の聖都でもある。見上げる城壁は最も高いところで五十mを超え、基底部の厚みは三十mに達する。その囲みは正確に一辺三十・二五kmの正方形を做し、東西南北の四つの大門、八つの中門、十六の小門から都内に碁盤の目のように大中小の通りが交差し、石造りの厳しい建築が整然と列在する中、各所に点在する大聖堂の楼塔が無数に鋭利な屋根を天に向けている。

それらの中でも王城であり、かつ至聖域であり、シルヴィエ聖教の大総本山ヴァリシリシィ大聖堂は数段に列なった幾重もの控え壁に支えられながら中央に空前の五百七ｍを誇示するリミナレトの塔を有している。その頂上へは馬で登るほか、幾条もの鉄鎖を巨大な歯車で巻き上げるエレベータがあり、その駆動力は蒸気とナウマモス象との併用であった。

北大陸の北緯五十度以上になる場所には長く茶色い体毛に覆われた象が生息している。盛り上がった肩の高さは最大で五ｍに達し、牙が斜め下方に落ちてから斜め上方に大きく湾曲し、尖端部で内側に向きを変えて左右の尖が突き合うようになっていた。その長さは優に三ｍを超えている。

ヴァリシリシィ大聖堂のファサード（正面）の破風には直径二十四ｍの薔薇窓があった。彫刻とステンドグラスとで荘厳され、シルヴィエ聖教の聖なる紋章を象っている。

聖教への絶対信仰を中心に統治の行われる帝国において皇帝はすなわち宗教界の頂点でもあった。それは五人の大枢機卿による互選で択ばれる。大枢機卿らが互いに額を突き合わせてその中から一人の絶対皇帝を択び出すので直截的な世襲制ではないが、大枢機卿が聖者イサの五人の使徒を祖先に持つ家柄から択ばれることをおもえば半世襲制である。民主的な発想から見ればもっと広い範囲から候補者を挙げる方がより優れた手法であるとおもわれがちだが、それは国内外の事情が安定しているから可能なことであって、或る程度力がものを言う世界ではむしろ有資格者を限定した方が権力抗争する者の範囲が狭まって内政は比較的安定するのである。世襲制と云うものは統治者の生理に適い、状況によっては彼支配者が権威への心情的共感を感じる場合もあり、その一定の抑制力と云う点も併せ考えみれば全面的に劣った手法とは言えない。

ヴァリシリシィ大聖堂の隣に大枢機卿イヴィルの住むオウッド家の大枢機卿館がある。稀代の建築家ミハルアジェロの設計により、斉暦一四二三年に竣工された奇抜な形様式の建築でスバハルト通りを挟んで大聖堂を守護するように聳えていた。

イヴィルは薄い金髪を垂らし、端正な彫刻のような顔立ちの若い男で、眉毛が殆ど見えないくらいに薄く、眼は化粧をした舞台女優のように大きく、明るい色の睫毛が翳りで存在を示していた。

深紅の絨緞が敷かれ、聖人の事蹟を深い色彩で表すフレスコ画の壁面が枠で幾つにも区切られ、枠には漆喰細工の精霊像や鳶や葉の象られ、ところどころを繊細な黄金細工が飾り、格子天井も幾つもの神の秘蹟が描かれている執務室。彼は緑や蒼や桃色の縞目模様の大理石の机に向かい、軽石で撫でられた羊皮紙の書類を齢に似合わぬ老練な眼差しで閲読している。

顎を上げた。

「で、レオンの消息はユヴィンゴで途絶えたのだな」

「さようでございます猊下、昨今、彼の国の首都モスコクールでは狼藉者らが跋扈暗躍し、捜索の手もなかなかにはかどらぬのでございますが、いずれ時間の問題かと」

「総督府のゴルダヴィ総督に余の命令書を送れ。管轄下に聖教史最大の背教者が潜入したと知らせろ。告訴状は大枢機卿会議の決定により異端審問秘密会及び神聖真義審査秘密会で審議され、受諾すべしの勧告状を受けているのだ。是非はない。既に大枢機卿ソクリトゥスはヴィヴィドゥ以来かつてなかった最高位者にして獄に繋がれる者と云う身の上となった。その子息レオン・フランシスコ・シルヴィエは現在、貴管轄下に逃亡中であるとな」

「畏まりました。世紀の謎であった大反逆者の正体がこともあろうか、聖祖の最も親近の者であった事実、しかと伝えましょう」

「そうだ。もはやシルヴィエ家は神聖国家最高の名家ではない、躊躇することなくレオンを拿捕しろと伝えろ。使徒エアイ・シルヴィエは裏切り者であった、よってシルヴィエ家はその神授権を無効とされた。これで当初六つあった大枢機卿家は四つになったのだとな」

「おお、猊下。誠に恐ろしいことです。未だ信じられない。私どもの二千数百年の信仰が覆されたのですから。総督閣下は篤信の方、信じがたきは私以上でしょう」

「総督が疑うことなきように『オユ文書』の写しをつけておけ」

「さにあらば確実。なん人が異議しようとも、あの聖著名がありますから」

「しかり。念を入れて、『疑義あらば第五節を熟読せられよ』と附記せよ」

「ああ、あの身も震えるような驚愕の一節ですな。

『アスタウトの若獅子よ、汝が毒を盛った。私の眼にはそれが見えている。このことは最初からわかっていたことなのだ。されば私はそれを追及しないであろう。神の試みを知れ。死は定めである。天によって為すべきことは為された。汝らが憤り、復讐し、また歎くならばそれは御心に叛くものである』

ああ、なんと云う痛切な、なんと云う悲嘆、なんと云う聖の聖なるお言葉か。神よ、我らが聖祖に崇高なる賞讃を与え給え。久遠のお褒めを賜れますよう。そしてなにをも超えたる神に栄光あれ」

「我が祖先、使徒オユ・オウッドがそれを記し、聖祖の名が直筆されたその文書はプラトナ古文書館で発見されたと補足するんだ。ウィザン館長の証明もつけろ。これで絶対だ。命令書の最後はこう閉じるのだ。

『よって余は命ずる。

貴下、おもい留まるべからず』と」

秘書役である宗学僧スタウトはイヴィルの傍に寄ると潜めた声で言った。

「それからもう一つ。羅汎の諜報員がアマーリャ諸島周辺で活発に動いていると云う報告がありました」

イヴィルは顔を顰め、

「まさか、この一件に乗じてなにか企んでいるのではあるまいな。仔細はつかんでいないのか。ともかく報告書を全て余によこせ。

コプトエジャ絡みでは」

と洩らしてから口をつぐんだ。

「彼の古王国がなにか」

「ふ。なんでもない」

帆に夜風を孕み、波を越えて進む。イタルが驚愕した。

「って言うと、まさかその系譜図とやらは」

「むろん、この筒の中にある」

「信じられない、そんなものをよく持ち歩ける」

「他にどうしろと言う。公式には持って来られない。帝国マーロが政略的に利用しようと干渉してくることは間違いない。潜伏しているシルヴィエの諜報員が阻止、略奪、暗殺しようとするかもしれない。彼らの信仰を揺るがす恐れがあるからね。少なく見積もっても現在の宗教的権威、威厳に翳りをもたらすことは確かだ。我がコプトエジャが文化的に世に優越しているとは言え、世界を制しているものはまず軍事力だ。この存在を知らしめ、公に動かすなど我が王が認めるわけがない。ならば独りで隠密にやるしかない。

まだ南方の勢力下だからどうにかここまでは来たが、これから先は複数の協力者を予定している。そうでなければ不可能だ」

「つまりもの凄く危険なわけじゃないか。到底歓迎されるはずもないものを持ってなぜわざわざ北大陸に赴こうとしているのか理解できない。

どうしようって言うんですか。僕を大枢機卿に返り咲かせようとでも？　冗談じゃない。それにこんな危険を冒してまでもしなければならない目前の危機って、いったいなんですか」

そのとき〆裂が声をかけた。

「おい、旗を掲げるのを手伝ってくれ。間もなくだ」

「後で話そう、イタル。関所が迫ってきたようだ」

ズォツアの島影が見えてきた。入江はちょうど輪のような形をしている。あたかも輪の一部が欠けたかのような入口の左右には胸壁を備えた砦があり、篝火を焚いていた。〆裂の揚げた荒鷲の旗がなければただの海賊船だ。たちまち左右から砲撃の的となっていただろう。最初の関所を越えると入江のうちは見渡す限り暗く、十数隻の灯火が動くばかり、堰の灯が遠く見えるのであった。堰とは第二の関門である。ズォツア港には第一の関所があった。入江の中間に大岩を積んで築き上げた堰で、門扉を設けていた。その門を抜けると左右を壁に挟まれ四万㎡もある、言わば巨大な縦長の生簀で、次の門扉が開かなければそこから出られない仕組みである。怪しい輩は前後を塞がれて閉じ込められてしまうわけである。

船を寄せて〆裂が下りた。ランプの吊るされた管理事務所の受付窓口に顔を出す。雑談しながら書類に記入して身分証を提示した。それで終わりだ。門が開けられた。とは言え、開けられたのは全体のうちほんの一部で、通用門のような小門の部分だけだ。

〆裂が水先案内人に綱を渡した。赭ら顔の男でチップを弾まれた途端不機嫌そうだった眼が醒めたらしい。鼻唄まで出てきた。〆裂は鼻先で笑いながら言う。

「そんなに印象には残らんさ。俺はいつもこんな感じだからな。釣ったイカでも土産に渡せばあそう云うことかと勝手に合点してくれる」

イタルが呆然と門を見上げているのを見てまた言った。

「ここはスール勢の力の及ぶ北端なんだ。飽くまで公的な、だが。もちろん、この先にも南の人間はたくさんいる。帰化して数百年と云う者だってかなりいる」

「いちいち開閉するんじゃあ、商売が遅れますね。渋滞しないのですか」

「昼間は開け放してあるのさ。夜だけだ。そうでなければおまえの言うとおりさ。日中なら開け放していても問題はない。通常の大型商船はまず小舟をよこす。通航手続きのためにその都度、寄港していたのでは堪らないからな。

だから閉める必要があれば事前にわかる。そのときになってからで十分に間に合うのさ。逆に中型船以下ならばさほど敵にならん。前門と後門との間に封じて上から火矢でも射ればそれで終わりだ」

「大砲は使わないのですか」

「こんな狭い場所でか。危険過ぎるだろう。命中率はいいだろうが、おもわぬ被害が出る可能性がある。戦闘はこどもの喧嘩ではない、あらゆるリスクを想定してこれを避ける。そうでなけれ

ば大敗を喫することもある。戦場では考えられないようなことが起こることがよくあるんだ」

「大型船にはなぜ同じ方法が取れないのですか」

「大型船には複数の大砲が積める。船からは見れば逆にどちらも標的だらけになって都合がいいんだ。それにもし船内に二百人ぐらいの武装兵が隠れていたら反撃しながら船艇を下ろして壁に梯子をかける別働隊が組めるだろう。ズォツアの第二関に百人ぐらい常駐できればそれでも問題ないが、いつ来るかわからぬ敵にそう出費も重ねられない。そう云うわけさ」

「そうか、ほんとうにそうだ」

日中なら船の往来と荷物の上げ下げとで立錐の余地もない港も深夜二時では静かなものであった。灯火も寂しげだ。出入国管理事務所は桟橋のすぐ近くにあった。

尖頭を歩く〆裂が振り返って微笑する。

「打ち合わせどおりだ。ほら、あの窓口でぼんやり待っているいかれた奴が叭羅蜜斗（ぱらみと）だ」

脱色のし過ぎで殆ど金色になった髪をでたらめに刈り込んでから数ヶ月も放っておいたかのような、嵐のような頭。こちらを見てへらへら笑っている。

「へい、〆裂、遅かったじゃないか。待ちくたびれちまったぜ」

「すまんな、トラブルがあったんだ。船の用意はできているか」

「ああ。出国許可も取ってある。さっさと行こうぜ。今日で俺も退官だ。仕方がなくてやっていた仕事さ。これでおまえみたいな自由な身の上になるんだ。今のところは不穏な動きは見えていない。見える範囲ではね。なあに、これから先からはマーロも活動がしにくくなるはずだ。逆にシルヴィエを警戒しなくてはならなくなるがね。

そちらがユリアスだね。よろしく。その坊主はなんだ？　いや、急ごう。そっちに出るよ」

叭羅蜜斗は軽装な荷物を背負うと剣を佩いて事務所から出てきた。不思議におもってイタルはユリアスに訊いた。

「どうして彼らはこうも簡単に職を捨ててあなたの言う使命に身を投じられるのですか。これからやろうとしていることはそんなにも重大なことなのですか」

「むろんだ。

だが半分は彼らの性格によるものらしいな、見る限り。ともかくも危険であることは承知のはずだ。そう云う点を〆裂が言い洩らすわけがない」

叭羅蜜斗が親指で行方を指しながら飄々と言う。

「さあさあ、冒険の始まりだ。来いよ、こっちだ。哥舞妓（かぶき）を紹介する。奴も待っているぜ」

「いったいどんな男なんだ、少なくとも男だとはおもっているが」

ユリアスが歩きながら問う。叭羅蜜斗は初対面の相手にもすかした態度を改めない。
「ボンボンさ。海商で儲けた家柄だ。平民だが、かなり昔からだ。ご先祖は大した俊才だったらしい。賢者って奴さ」
港の外れに一隻の高速艇が待っていた。
哥舞妓と云うのは鼠のような髪に錦の和服を羽織ってデニム地の作業ズボンを穿いた若い男で、艇を前にして波止場にぼんやり坐って葉巻を吹かしていた。叭羅蜜斗が驚き呆れた声を上げる。
「おい、どうした。支度は終わっているのか。すぐ出るぜ」
「なあに、そんな気分じゃないのさ。
まあ、中を見ればわかる」
〆裂と叭羅蜜斗とが顔を見合わせる。二人は急いで甲板に上がった。ユリアスの後に続いてイタルも恐る恐る上がる。吊るされたランプに照らされる高速艇は贅沢な仕様で入念に磨かれ、あたかも豪邸の床のようであった。
イタルは思わず歎息する。
「到底これから危険な冒険に出ようとはおもえないよ、これ」
急ぎ足ながら振り返って叭羅蜜斗が応えた。
「奴はラグジュアリーな趣味なのさ」
「それに」〆裂も言う、振り返りもせず。「これ見よがしの船しや、余計に警戒される。それを考えてかどうかは知らぬが」
船室は半ば船体に入るようになっていた。最初に短い階段を下りかけた〆裂が唸る。叭羅蜜斗も扉に手をかけたまま声を上げた。
「なんてこった」
「これは」
うめくユリアスの脇から覗いたイタルの眼には豪奢なキャビンが、マホガニーのテーブルや繻子を張る椅子、シャンデリア、鞣革のソファと嵌木細工の飾り棚とを置かれ、金銀細工に壁を飾られ、アラベスク模様の絨緞を敷かれ、そして破られた絹のカーテンを緋に染められ、床の中央に仰向けで血まみれの男を横たえさせているのが映った。黒い外衣に身を包み、鬚のない、日に焼けた大男。チュニック型の鎖帷子を胴巻きのような太い革ベルトで締めている。薄い唇は半開きで瞳孔が大きく、晰かに死んでいるとわかった。冷たい夜の潮風が背を走り抜ける。
暫時後。

五人の男たちは額を突き合わせて考えていた。
「で。さて、どうするか」
哥舞妓が言った。
「つまりこれをどうするか、そしてこれからどうするか、そう云うことだな」
〆裂が既に冷静になって言う。
「撤退はありえない。結論から考えれば自ずから答は出る」
ユリアスが決然と言った。
「だがよぉ、この屍をどうする。当局に届けるか。まさか航海中でもないのに人の亡骸を海に沈めるわけにも」
叭羅蜜斗が異議を唱える。
「いや、そのまさかだ。見ろ、こいつはマーロの暗殺者だ」
ユリアスの言葉によってイタルの背には再び冷たいものが走った。
「どうしてわかるのですか」
「この男はカーテンの後ろにいるところを刺された。だからカーテンの下にこの男のナイフが落ちている。ナイフの刃には血が附着していない。男はナイフを持って隠れていたところを刺されたのだ。だから手に握られた絹の切れ端はカーテンと同じ色彩をしている。
ナイフの柄に彫られた紋章はおなじみだ、獅子の頭にドラゴンの体、鷲の翼に虎の爪、マーロの徴だ」
〆裂が微笑する。
「なるほど。明快だな。海に沈めてもよい気がしてきた」
叭羅蜜斗が歎息する。
「仕方ない、やるか」
哥舞妓が口笛を鳴らしてガラスの棚を開ける。
「その前に一杯呑むか。
暗殺者への弔いと新たな敵への祝杯だ」
「つまりそれでは」　イタルが声を震わせた。
「いったいだれが彼を殺したとおもうべきでしょうか」
ユリアスが驚いた表情を作るが、替わりに〆裂が応えた。
問うまでもない。俺たちの前に姿を見せない以上は仲間ではないのだ。
シルヴィエの手の者と考えるのが妥当だろうな」

「ひゃふう、素敵だ。飛んで火に入る夏の虫、か」

哥舞妓がそうぶざけ、叭羅蜜斗が言葉を足す。

「俺たちにここで死なれては困るってわけだ。秘密の書類がスールの勢力下で暴露される場合があるから。どうせなら北へ来てもらってから奪って殺す、或いは死体を見て怖気づいて逃げてくれてもそれもまたよしってわけだ。そんなところか。警戒を兼ねてもいるわけだ。よくできているぜ」

ユリアスが結語した。

「生命体は海から生まれたと言う。海から生まれたものは海に帰せ。母なる海の心はその姿のように広い。

だが私たちには関係のないことだ。出航しよう。法的手続きに問題はない」

イクシュヴァグの残した系譜図によればレオン・フランシスコ・シルヴィエもイヰの血縁者である。イーリヤはエレミア派であり、レオンの恋人。買収された羅教司教の陰謀とついでの邪恋がわかる。モスコクール地下の下水道の偽地図を仕込む。沢を遡行する。

（粗描）

乂裂の身の上。ユリアスの身の上。ヰィイ。人狼。神聖絶対皇帝チラノス・バルガス・デ・シルヴィエ。イヴィン・イーノ（龍の刺青）はイヰ・イーノの弟。エアイ・シルヴィエ（天の鴉）はその従兄弟。オユ・オウッド（若獅子）はエレミア・イーノに恋し、エアイを妬んだ。ドワヴィドに頼んで殺害を依頼するも、失敗する。聖者の死後、『オユ文書』を秘匿したまま旅に出る際、エアイに称号の交換を申し出る。以後、若獅子はシルヴィエ家の称号となる。従兄弟婚は禁忌である。

ユイ・イアエ（鷹の叡智）、ヨト・スヴァノア（雷霆の剣）、ノヴェ・カムヤ（苔古りし盤）

ここに聖の聖なる聖者イヰの系図を記す。

イヰの母はヲユであった。ヲユの母はエハであった。エハの母はアイであった。アイの母はユリアであった。ユリアの母はヰイであった。ヰイの母はイシュクワであった。イシュクワの母はヲウミィであった。ヲウミィの母はエロアであった。エロアの母はアンであった。アンの母はユヰであった。ユヰの母はヰィアであった。ヰィアの母はイヴンであった。イヴンの母はヲユであった。ヲユの母はエハであった。エハの母はアイであった。アイの母はユリアであった。ユリアの母はヰイであった。ヰイの母はイシュクワであった。イシュクワの母はヲウミィであった。ヲウミィの母はエロアであった。エロアの母はアンであった。アンの母はユヰであった。ユヰの母はヰィアであった。ヰィアの母はイヴンであった。イヴンの母はヲユであった。ヲユの母はエハであった。エハの母はアイであった。レオンのラクロワ家はイヰの母であるヲユの出身家に列なるヴィング家の末裔である。弟子ヴァングストンの謀略によって神聖系図は破棄された。

以上である。私はこの原稿をそっと卓上に置いた。それは陽射しの入る明るい部屋で微風に吹かれ、存在の歓びを美しい声で謳歌している。丁寧に本箱にしまい、再び深い瞑想に耽るのであった。